

# 菅原道真研究

——『菅家後集』全注釈（三十二）——

焼山廣志

今回は、前稿①に引き続いて五言排律「484 叙意一百韻」の最終回の注釈を試みる。対象とするのは百八十一句から二百句までである。注釈を進める上での「凡例」は前稿②のそれに倣う。以下、作品の注釈は便宜上、十句ずつに分けて行っていくたい。

484 叙意一百韻  
181句から190句

本文

平仄

185	184	183	182	181
覆巢憎穀卵*	胡爲脛々全*	苟可管々止	燈滅異膏煎*	風摧同木秀*
●	○	●	○	○
○	○	●	●	○
○	●	○	○	●
●	◎	●	◎	●

190	189	188	187	186
悲罰痛戈鋌*	悔忠成甲冑	功休石柱鐫*	法酷金科結	搜穴叱蜺蜾*
○	●	○	●	○
●	○	○	○	●
○	○	●	○	○
○	○	○	○	○

\*脚韻は下平声「先」韻。韻字は「填、田、煎、全」である。

校異

○摧	…頭注「摧作擁」(大島)
○燈	…暗(静嘉)(松平)(彰考)(尊二)(尊二)(尊四)
○滅	…減(尊二)(尊二)
○異	…暴(尊二)
○煎	…煎(尊四)
○脛	…脛(大島)(太二)(太二)

▼頭注「脛々作脛々、按漢書楊惲傳脛々者未必全也注

脛々直貌」(大島)

▼傍注「脛見漢書」(松平)(彰考)(尊二)(尊四)(刊本)全本

○憎穀：憎鷺(松平)

▼頭注「憎穀作懷穀」(大島)

○卵：卯(刊本)全本

○蛭：蛭(静嘉) 蛭(彰考)

▼頭注「蛭作蛭」(大島)

○鐔：鐔(尊一)

○鋌：鋌(松平)

# 訓読

181 風に摧けて木の秀づるに同じ  
182 燈滅えて膏の煎らるるに異なる  
183 苟しくも営々として止まるべし  
184 胡爲れぞ脛々として全からむ  
185 巢を覆し穀卵を憎み  
186 穴を搜して蛭蟻を叱す  
187 法、酷して 金科 結び  
188 功、休して 石柱 鐔る  
189 忠の、甲冑と成らんことを悔い  
190 罰の、戈鋌よりも痛きことを悲しむ

# 口語訳

181 林の中で高く抜き出た木は、かならず風が吹き倒すものだ  
(今の私と同じように)。  
(私も官位高きが故に左遷の憂き目に会ったのだ。)  
182 油が尽きて消える燈火と、(強風にあおられて) 消える燈火とは異なるのだ。(私の場合は職を全うする前に小人の讒言によって志なかばにして断たれてしまった)。  
183 私を陥れた小人たちは、ブンブンうなりながらあちらこちらへ飛び回る青蠅のように宮中に止まっていることだらう。  
184 (このような宮中においては) どうして正直に事を行なっていく者が、無事に命を全うすることができようか。  
185 (親鳥のみならず、その) 巢をひつくりかえして中の卵まで割り  
186 穴の中まで探し出して蟻の子までつぶしてしまう。(そのように自分だけでなく、わが子孫まで徹底的に抹殺しようとする)  
187 (わたしは今) 厳しすぎる法によって裁かれ  
188 今までのわたしの功績は、石柱を刻むごとく過去のものとなった  
189 忠義を尽くすこと、(あたかも君のために) 甲冑のごとくなろうとしたこと(が)かえってあだとなったこと(を)悔いる。  
190 ほこで突かれるよりも酷い厳しい刑罰に嘆く身を悲しむ。

語釈

183○苟…『大漢和辞典』には、「②一時しのぎの意。動作や状態が「とりあえずの間だけ」「しばらくの間」回避されたり猶予されたりする意味を表し、「いやシクモ」「かりそめニ」と訓読する」と、説明する。

○営々…あくせくと働くさま、利に馳せるさま。

また、この語に対して『漢語大詞典』では、「象声詞」と説明し、つぎの用例を挙げる。

【『詩経』小雅・青蝇】

営営青蝇、止于樊<sup>はん</sup>。朱熹集傳、営営、往来飛聲、乱人聴也。

▼『青蝇の興すもの』として、「青蝇は、人に嫌われるいやな虫として佞人・讒人にたとえられる。それはうるさくつきまとわり、目の前を行ったり来たりすると、白いものを汚して黒く汚してしまう。いつの世にも権力者の周りに群がり、つきまとうこれら青蝇のような意地汚い小人どもは、まっとうに生きようとすると人生の勇者にとっては、この上なくくだらない最低の人種であった。」との説明がある。

(鑑賞中国の古典『詩経・楚辞』牧角悦子、福島吉彦著)

【楚辞】「卷四第四旧称・中止」に「意識路之營營」の用例が見える。「往來のせわしないこと」の意で使われている。

『白氏文集』には多くの用例が見える語であるが、以下二例を引いてみる。

「012反鮑明遠白頭吟」に「炎炎者烈火、營營者小蠅」の句が、又、「003白牡丹」に「成中看花客、旦暮走營營」の句が見える。

『菅家文章』「379遊龍門寺」に「樵翁莫笑歸家客、王事營營罷不能」の句が見える。

『凌雲集』「53-（8）自山峙乘江赴讚岐在難波江口述懷贈野二郎」に「可歎乘桴客、營營不得容」の句が見える。

184○胡爲…どうして、なぜ、なにゆえ。疑問の言葉。「なんすレン」「何爲」と同じで「どうして」「なんのために」などと訳す。

○脛々…「脛々」は「まっすぐなさま」「正直なさま」。『漢書』

「楊惲傳」に「事何容易、脛々者未必全也」の一文がみえる。

また『漢語大詞典』には、「脛脛」「固執貌」と説明する。

185○覆巢<sup>ふくそう</sup>…巢をくつがえす。『呂覽』「應同」に「天覆巢毀卵、則鳳凰不至」の用例が、また『史記』「孔子世家」に「覆巢毀卵、則鳳凰不翔」の用例が見える。

○穀

…たまご、孚卵。『廣韻』には「穀、鳥卵」と説明する。

▼『覆巢破卵』…巢をくつがえして卵をやぶる。転じて親の災いに子も傷つけられる喩。本亡びれば末も従って亡びる喩。

『新語』「輔政」に「蓋自處得其巢、任杖得其材」也、秦以刑罰爲巢、故有覆巢破卵之患」の用例が、また『呉志』「陸凱傳」に「有覆巢破卵之憂」の用例が見える。

▼『覆巢之下、復有完卵乎』…くつがえった巢の下には完全な卵は無い。転じて、根本が亡びれば枝葉は従って滅びるの喩。『世説新語』「言語」にある孔融の二兄の故事に基づく語。↓補説③

『漢語大詞典』では『覆巢之下無完卵』の項で、「鳥巢翻倒了、就沒有不碎的鳥蛋」と説明し、補説の『世説新語』の一文を引用している。

また、『覆巢破卵』の項で、「同『覆巢毀卵』」と説明し、先の陸賈『新語』の例を引く。

また、趙元一の『奉天錄』「卷二」の「如或固守窮城、不識天命、必使覆巢破卵、易子析骸」の用例を引く。また『覆巢毀卵』の項では「傾覆其巢、破碎其卵。

喩徹底毀滅。」と説明し、『呂氏春秋』「応同」の「夫覆巢毀卵、則鳳凰不至」の用例、および『孔子世家』「困誓」の「覆巢毀卵則鳳凰不翔。亦作『覆巢礪卵』」

の用例を引く。

186 ○蚯 蟻の卵

○蚯 蟻の子と蝗の未だ翅を生じないもの。蟻兒。

『国語』「魯語上」に「鳥翼穀卵、蟲舍蚯蟻」。『注』蚯、蝗子也。可<sub>レ</sub>以爲<sub>レ</sub>醢、蟻、茗陶也。可<sub>レ</sub>食の用例が、また『文選』の張衡の「西京賦」に「獲<sub>レ</sub>胎拾<sub>レ</sub>卵、蚯蟻盡取。『注』翰曰、蚯、蟻子、蟻、蝗子」の用例が見える。

『漢語大詞典』では「蟬蟻卵和蝗虫子。亦泛指幼虫」と説明し、『国語』「魯語上」の例を同じく引く。

▼ここでは、道真の左遷の宣命に連座して、大学頭「高規」が土佐介に、式部丞「景行」が駿河権介に、右衛門尉「兼茂」が「飛驒権掾」に、文章得業生「淳茂」が播磨にと、父子が五ヶ所に散り散りに京を追放されたことのみならず、妻や年長の娘たちは、京の自宅に監禁状態にされ、道真の門下である「菅家廊下」出身の道真派の官僚たちまでの追放に及び、これが苛酷なものであったことを示唆する語。

187 ○金科…法令。條目

『齊書』「武帝紀贊」に「威承景曆、肅御金科」の用例が、また『唐書』「音楽志、明堂樂章」に「化

光<sub>二</sub>玉鏡<sub>一</sub>、訟息<sub>二</sub>金<sub>一</sub>科<sub>二</sub>」の用例が見える。

▼【金科玉條】…貴重な法律。金玉の如く立派な科條。揚雄の『劇秦美新』「金科玉條、神卦靈兆、古文畢發、炳煥照耀」。「注」善曰、金科玉條、謂<sub>二</sub>法令也<sub>一</sub>、言<sub>二</sub>金玉<sub>一</sub>貴<sub>二</sub>之也<sub>一</sub>」の用例が見える。

『漢語大詞典』では、「法律、法令」と説明する。

▼【金科玉律】の項で「同<sub>二</sub>金科玉律<sub>一</sub>」と説明し、『文選』揚雄「劇秦美新」「懿<sub>二</sub>律嘉量<sub>一</sub>、金科玉條」「李善注」金科玉條、謂<sub>二</sub>法令也<sub>一</sub>、言<sub>二</sub>金玉<sub>一</sub>、貴<sub>二</sub>之也<sub>一</sub>」の一文を引く。

▼【金科玉律】の項では、「謂不可變更的法令或規則、後多比喻不可變更的信條」と説明し、杜光庭の「胡常侍修黃淨齊詞」の「金科玉律、雲篆瑤章、先萬法以垂文、具九流而拯世」の一文を引く。

『文選』卷四十八「符命」楊子雲「劇秦美新」に「懿<sub>二</sub>律嘉量<sub>一</sub>、金科玉條」の例が、李善注に「金科玉條、謂<sub>二</sub>法令也<sub>一</sub>、言<sub>二</sub>金玉<sub>一</sub>貴<sub>二</sub>之也<sub>一</sub>」とある。

188 ○休

…やめる。事をやめる。とどまる。おしまいにする。〔新字源〕。杜甫の「旅夜書懷詩」の「名豈文章著、官應老病休」の句の例がこれである。

○石柱…石の柱。古い墓道の前に立てたもの。石人。

▼「石人」・「石獸」陵墓前に並べた石づくりの人間

像・獸像。石柱とともに並べられた。

『漢語大詞典』では、「石華表。亦泛指石頭柱子」と説明し、酈道元の『水經注』「粉水」に「粉水傍有文將軍墓、隧前有石虎、石柱、甚脩麗」の一文を引く。

189 ○甲冑…よろいとかぶと。

『易經』「説卦」に「離為<sub>二</sub>甲冑<sub>一</sub>」。「疏」為<sub>二</sub>甲冑<sub>一</sub>、取<sub>二</sub>其剛在<sub>レ</sub>外也<sub>一</sub>」の用例が、また『書經』「説命中」に「惟口起<sub>レ</sub>羞、惟甲冑起<sub>レ</sub>戎」。「傳」甲、鎧、冑、兜鍪也。「疏」經傳之無<sub>二</sub>鎧與<sub>一</sub>兜鍪、蓋秦・漢已來始有<sub>二</sub>此名<sub>一</sub>、傳以<sub>レ</sub>今曉<sub>レ</sub>古也。古之甲冑皆用<sub>二</sub>犀兕<sub>一</sub>、未<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>用<sub>レ</sub>鐵者<sub>一</sub>、而鍔鎧之字、皆從金、蓋後世始用<sub>レ</sub>鐵耳」の用例が見える。ここでは川口久雄氏が、岩波古典文学大系本の頭注で触れられているように、『禮記』「儒行」の「儒有<sub>二</sub>忠信以為<sub>二</sub>甲冑<sub>一</sub>、禮義以為<sub>二</sub>干櫓<sub>一</sub>」。「注」甲、鎧、冑、兜鍪也」の一文を踏まえた語と解した。

『文選』卷二十一「詠史」左太沖の「詠史八首」に「雖非甲冑士、疇昔覽穰苴」の句が見える。

## 補説 ①

○181句目「風摧同木秀」についての考察

この句には次の故事及び白詩の投影がある。

▼『文選』「運命論」首、李蕭遠に次の一文を載せる。

「故木秀<sub>二</sub>於林<sub>一</sub>、風必摧<sub>レ</sub>之、堆出<sub>二</sub>於岸<sub>一</sub>、流必湍<sub>レ</sub>之、行高<sub>二</sub>於人<sub>一</sub>、衆必非<sub>レ</sub>之。」（傍線筆者）。

▼『白氏文集』068代書詩一百韻、寄微之の「木秀遭風折、蘭芳遇霰萎」二句

## 補説 ②

○182句目「燈滅異膏煎」の「燈滅」と「膏煎」についての考察

この句中の「膏煎」は次の一文を踏まえる。

『莊子』内篇人間世第四

▼「山木自寇也、膏火自煎也。」（傍線筆者）。

また「燈滅」の用例として以下のような句を挙げることができる。

▼『白氏文集』043夜雨

「早蛩啼復歇／殘燈滅又明」

○182句目「燈滅異膏煎」の「異」についての考察

この句の意は、「油が尽きて消える燈火と（強風にあらわれ）消える燈火とは異なるのだ」となるが、ここでいう「異」とは、どのような事を意味する語なのだろうか。まず、この語

は、181句の「風に摧けて木の秀づるに同じ」の「同」と対をなす語である。この句の意は前述したように「林の中で高く抜き出た木は、かならず風が吹き倒すものだ。（今の私と同じように）」となる所である。それに対比させて182句を考察すると、「燈滅」が「膏煎」に「因つてではない（＝異なる）」ことを意図した表現である事が見えてくる。「膏煎」とは先に指摘したように「莊子」の一文「燈火の膏は、燈火に用されるために却つてその身を燃え尽してしまふ。（才ある人間も、才あるが故に災にあうのだ）」の内容を踏まえる語である。

そこで道真が「燈滅」の語を、自作にどのように使っているのかを次に例示する。

▼『菅家文章』60 殘燈・風韻

「餘光不力扶持舉、競下蘆簾恐見風」

▼『菅家後集』508 燈滅二絶

「脂膏先盡不<sub>レ</sub>因風、殊恨光無一夜通」

この用例からうかがえることは「燈火の消え方」を、道真は二通り想定していることである。油が尽きて消えるのと、「風」によつて消される消え方である。この182句では「前者」の消え方と「異」と表現していることから、ここは「後者」の「風」によつて「吹き消される」意であることが明らかになる。ここでの「風」を人間に置き換えれば、道真を陥れた小人に当たるのであろう。主君のために報いる働きがまだまだできたであらうに、すべて絶たれてしまった道真の無念の思いが表れて

いるところだと考察した。

補説 ③

○185句目「覆巢憎穀卵」の句に込められている故事

『世説新語』「言語第二」の孔融には二人の子供がいたが、孔融が捕らえられた時、子供の命乞いをした。ところが子供たちは「ひっくり返った巢の下に割れない卵があるでしようか。（父上が今捕らえられようとしているのにどうして私たちが逃げる事ができましようか）」と言ったという、次の話を踏まえる。

孔文舉有「三子」、大者六歳、小者五歳。晝日父眠。小者床頭盜酒飲之。大兒謂曰、何以不拜。答曰、儉、那得行禮。

孔融被収、中外惶怖。時融兒大者九歳、小者八歳。二兒故琢釘戲、了無遽容。融謂使者曰、冀罪止於身。二兒可得全不。兒徐進曰、大人豈見「覆巢之下、復有完卵」乎。尋亦収至。

「二」魏氏春秋曰、融對「孫權使」有「訕謗之言」、坐「棄市」。二子方八歳九歳。融見収、弈棋端坐不起。左右曰、而父見執。

二兒曰、安有「巢毀、而卵不」破者哉。遂俱見殺。

世語曰、魏太祖以「歲儉禁酒」、融謂、酒以成禮、不「宜禁」。由是惑衆、太祖収法焉。二子髻髻見収、顧謂二子曰、何以不避。二子曰、父尚如此、復何所避。（下略）

二

484 叙意一百韻 191句から200句

本文

平仄

191	瓊瓊黃茅屋	●●○○●
192	*荒荒碧海壖	○○○○●●
193	吾廬能足矣	○○○○●●
194	此地信終焉	●●●●○○
195	縱使魂思峴	●●●●○○
196	其如骨葬燕	○○○○●●
197	分知交糾纏	●●○○●●
198	*命詎質筵簞	●●●●○○
199	敘意千言裏	●●○○●●
200	何人一可憐	○○○○●●

\*脚韻は下平声「先」韻、韻字は「焉・燕・嘆・憐」である。

校異

○荒荒…茫茫（松平）（大島）（尊四）（太二）（太二）（刊本）

全本

▼頭注「茫茫作荒荒」（大島）

○糾…頭注「糾作紕」（大島）

○詎…誰（尊一）（尊二）（尊三）（内閣）（静嘉）（加越能）

(彰考)

○筵筵：▼頭注「筵筵作篋筵」（大島）

訓読

191 瓊瑤たり 黄茅の屋  
192 荒荒たり 碧海の壖  
193 吾が廬は能く足りぬ  
194 此の地は信に終焉ならん  
195 縦使魂 峴を思ふとも  
196 骨の燕に葬らるるを其如せん  
197 分は糾纏に交はるを知る  
198 命は詎ぞ筵筵に質さん  
199 意を敍ぶ千言の裏  
200 何人か一に憐むべき

口語訳

191 (その私は) 小さく粗末なあばらや(に、住み)  
192 薄暗く暗澹とした(西海の果ての) 青海原のほとり(に、  
立つ)。  
193 私の粗末な廬は今の私には十分事足りているし  
194 この地がおそらく私の終焉の地となるであろうことは間違  
195 いなからう。  
たとえ西晋の羊祜のように、おのれの魂が峴山(湖北の襄

陽)を恋しく思っても(どんなに京都を恋しく思っても)

196 その骨が遠く離れた北方の燕に葬られるとしたらどうであ  
ろうか。(私の、この西方の僻地に生を閉じようとしている  
心情を察してもらいたい)。

197 (今となつては)さだめというものはあざなえる縄のような  
ものであると知った。

198 (私の)運命を(今さら)竹を折って占って将来を問うた  
ところで何になろう。

199 以上この千言のうちに、私の意(思い)を述べたが  
200 (この詩を読んで)いったい誰が専念に(私のことを)憐  
れんでくれるというのか(そんな者は存在しないであろう)。

語釈

191 ○瓊瑤…①ちつぽけなさま。②取るに足りない様子。小さい  
さま。

『文選』張衡の「東京賦」に「既瓊瑤焉。岐陽之蒐、  
又何足数。(注)綜曰、瓊瑤、小也」の句が見える。  
○黄茅…ちがやの一。きいろいちがや。

「茅」は「ちがや(イネ科の野草の名)。紙の原料に  
したり屋根をふく材料となる。古くは「ちがや」の  
葉で「ちまき」を包むのに用いられた。」と説明の  
ある植物名で、「茅屋」として「かやぶきの家。質  
素な家のたとえ。」の意で使用される語。



『漢語大詞典』には、「茅草名」と説明し、李時珍の『本草綱目』「草二・白茅」の「茅有白茅、菅茅、黄茅、香茅、芭茅数種……黄茅似菅茅、而茎上開葉、茎下有白粉、根頭有黄毛、根亦短而細固無節、秋深開花穗如菅。可爲索綯。古名黄菅」の一文を引く。『白氏文集』「0590山鷓鴣」に「黄茅岡頭秋日晚、苦竹嶺下寒月低」の句が、「0990酬元員外三月三十日慈恩寺相憶見寄」に「赤嶺猿聲催自首、黄茅瘴色換朱顏」の句が見える。更に、本詩への投影が強く見られる『0608代書詩一百韻 寄微之』にも、「官舍黄茅屋、人家苦竹籬」の句がある。ここでは、後述するが、『0608代書詩一百韻 寄微之』の表現内容を道真が意識して使っている所と考えたい。

192 ○荒荒……うすぐらいさま。暗淡たるさま。

杜甫の「漫成詩」に「野日荒荒白、春流浪浪清。

」注「王洙曰、「一云『茫茫』」の句が見える。

『漢語大詞典』では「①惊擾貌。荒、通『慌』」と説明し、『宣和遺書』前集の「當初只爲五代時分、天下荒荒離亂、朝屬梁而暮屬晉、干戈不息」の用例を、また「②黯淡迷茫貌」と説明し、さきの、杜甫の「漫成詩」の一句を引く。ここでは「②」の意を採る。

○碧海……あおうなばら。滄海。

『海内十洲記』「扶桑在『東海之東岸』、岸直、陸行登岸一萬里、東復有『碧海』、海廣狹浩汗與『東海』等、水既不『鹹苦』、正作『碧色』甘香味美」が、また隋煬帝の「望海詩」に「碧海雖欣屬、金臺空有聞」が、また薛道衡の「從駕天池應詔詩」に「駕臨碧海、按驥踐瑤池」が、また盧照鄰の「長安古意」に「節物風光不相待、桑田碧海須臾改」の用例が見える。」

『白氏文集』「2335得湖州崔十八使君書喜與杭越鄰郡因成長句代賀兼寄微之」に「越國封疆吞碧海、杭域樓閣入青煙」の句が見える。

『菅家文草』「256 遊覽偶吟」にも「鳥出樊籠翅不傷、青山碧海任低昂」の句が見える。

○塙

…①廟や宮殿の内側と外側の垣との間の空地。②城郭に沿った空地。川沿いの空地。(古訓) ホトリ・アラカキ。

▼ここでは謫居のある「太宰府の地」を「西海のほとり」に見立てた表現。

194 ○終焉…命の終わり。一生の終わり。臨終。死。

『漢語大詞典』では「終焉之志」の項に、「在此安身終老的想法」と説明し、『晋書』「王羲之傳」の「羲

之雅好服食養性、不樂在京師、初渡浙江、使有終焉之志」の一文を引く。

また、廬照隣の「宴風泉石翁神祠詩序」の「形木雙枯、將有終焉之志」の一文を引く。

『白氏文集』「瀾泛春池」に「天與愛水人、終焉落吾手」の句が見える。

195 ○縦使…タトヒ。仮定の言葉。「縦令」に同じ。『漢辞海』では、つぎのように説明する。

### 句法

ある条件を仮定しても、結果は変わらないという譲歩の意味を表し、「縦」は条件節の文頭またはその主語のあとにおく。「タトヒ…(トモ)」「たとへ」も許容される」と訓読して、「かりに…としても」と訳す。

張謂の「題長安主人壁詩」に「縦令然諾暫相許、終是悠悠行路心」の句が見える。

『漢語大詞典』では「即使」と説明し、顔之推の『顏子家訓』「養生」にある「縦使得仙、終富有死」の一文を引く。また杜甫の「戲為六絶句之三」にある「縦使盧王操翰墨、劣於漢魏近風騷」の句を引く。

### ○峴

『菅家文草』『菅家後集』にも以下のような用例が散見する。

▼39 八月十五夕侍月、席上各分一字——(四)に「縦使清光纔透出、當勝徹夜甚簪疎」

▼364 早春侍内宴、同賦開春樂、應製に「縦使春聲天地滿、不如萬歲報山椒」

▼55 仲秋釋奠、聽講周易、賦鳴鶴在陰に「縦使清聲千萬和、不用十翼豈高聽」

▼176 ト居に「縦使門庭皆冷俛、不辭到老富鶯花」

…南方荊州の襄陽にある峴山のこと。「羊祜」の故事を踏まえる。ここでは「京都」を指す語。

### ↓補説 ①

▼峴山…「羊祜」の故事を踏まえたものとして杜甫「隨章留後新亭會送諸君」に「己墮峴山淚、因題零雨詩」の句が、又『白氏文集』にも「267送馮舍人閣老往襄陽」に「莫戀漢南風景好、峴山花盡早歸來」の句が、「襄陽道」に「羊公名漸遠、唯有峴山碑」が見える。又、『0608代書詩一百韻。韻、寄微之』には、「峴亭」として次の句が見える。「心搖漢皋珮、淚墮峴亭碑」、「0908東南行一百韻」にも、「峴陽亭寂莫、夏口路崎嶇」の句が見える。

○其如…『漢辭海』には「仮定を表す接続詞として条件節に置く。『それ』と訓読するが『もし』と訓読してもよい。『もしも…(ならば)』『かりに…(ならば)』などと訳す」と説明し、『孟子』『梁惠王上』の「其如是、孰能禦之」の用例を引く。また『論語』『述而』に「子曰、天生德於予、桓魋其如予何」の用例が見える。

『漢語大詞典』には「怎奈、无奈」と説明し、劉長卿の「峽石遇雨宴前主簿從兄子英宅詩」に「雖欲少留此、其如婦限催」の句を引く。

○燕…河北省の古名。今の天津地方で海にも近い。北方に位置し極寒の地。ここでは「太宰の地」を指す語。

▼菅原道真の「賦」「清風戒寒賦」の中で、「洞庭波白、燕塞草衰」(秋風が水面を吹き抜けると)かの洞庭湖には波が白くたち始め、秋風が山野を吹き抜けると、かの北方の燕塞の地ではいち早く草木が枯れ始める(拙稿「菅原道真研究——『清風戒寒賦』一首」注釈より引用)と使っている例を見出せる。この賦は『本朝文粹』にも収録されており柿村重松氏は『本朝文粹注釈』語注で、「案燕在北方、最寒、塞、則長地也」と説明する。

杜甫の「送裴五赴東川」に「何日通燕塞、相看老蜀

門」の句が見える。

197 ○糾纏…①より合わせた縄。あざなえる縄。

②縄のようにまつわり続く。「糾」は「三すじよりの縄」。「三本の糸で撚った縄。一説に二本撚りの縄」。『漢語大詞典』には、「亦作糾墨。繩索」と説明し、さらに「交互纏繞」との説明を補足する。『文選』賈誼の「鵬鳥賦」のつぎの句を踏まえた語。

▼「夫禍之與福兮、何異糾纏。李善注、『字林』曰、糾、兩合繩、纏、三合繩。應劭曰、禍福相與為表裏、如糾纏繩索相附會也」。

【鵬冠子】「世兵」の中にも次の用例を見出せる。

「禍乎福之所倚、福乎禍之所伏、禍與福如糾纏(注)此言、禍福相為表裏、執如索綯纏索也」。

198 ○詎…「なんぞ」「いづくんぞ」と訓み、反語の意となる。

なお「誰」とする諸本もあるが、「誰」は(○)であるため、二四不同の原則から考えて、ここでは写本の一部や刊本にある「詎」(●)を採った。

○筵草…古の卜法の一。トする時、眼前の草木の枝を折りその多寡を数えず三本ずつ数え取って、その残りを用以て吉凶を定めるもの。『新字源』では「草を結び竹を折り、その結び目や折れた形で占いをする」と説明する。

『漢語大詞典』では、「亦作筵筵。古楚地人占卜的一種方法」と説明し、『楚辭』「離騷」の「索けいほう歛茅」以筵筵兮、命二靈一靈二為レ余占レ之。王逸注、索、取也。蓍茅、靈草也。筵、小折竹也。楚人名結草折竹以卜筵」の用例を引く。

この用例について新釋漢文大系『楚辭』の「語釈」では、「王逸は、『筵』は小折竹なり。楚人草を結び、竹を折りて以つて卜するを名づけて『筵』」という」と注する。五臣注に「竹筭」という。閑一多の「枚補」に『玉燭宝典』『類聚』その他に二字とも艸冠になっているという。ここは動詞に用いたものと見て、草木を以つて占うと解する。一に「歛茅と筵とを索りて筵す」と読み、靈草と小さく折った竹とで占うのだと、いう。しかし筵筵の二字を草木にして数え占うと解する閑一多説が楚辭の語法上からも穩当であろう」（53～54頁引用）との説明を載せる。

199 ○敘意…おもいを述べる。『漢語大詞典』では、「表達心意」と説明し、『三国志』呉志、趙達伝」の「倉卒乏酒、

又無嘉肴、無以敘意、如何」の用例を引く。

200 ○何人…どのような人。いかなる人。なんびと。

『菅家文章』では、「98 有所思」に「不知我者謂我

癡、何人レ口上將鎖骨」の句が、又、「307 冬夜有感、簡藤司馬」に「霜籬數歩菊花殘、更有何人レ此日看」の句が見える。

○一 …ここでは『漢辭海』に説明するように「始終。ずっと。

（行為や状況が途切れたり変わったりしない意）。」に。專念に。もっぱら」の意で解釈すべき語。

○可憐…あわれむべし。かわいそう、あわれに思う。氣の毒に思う。いつくしむ。

『漢語大詞典』では、「值得憐憫」と説明し、『莊子』の「庚桑楚」の「汝欲返二性情一、而無二由入一、可レ憐レ哉」の用例、および白居易の『亮炭翁』の「可レ憐レ身上衣正單、心憂炭賤願天寒」の句を引く。

白詩にも多用されている語である。一例を挙げると『白氏文集』「334 杪秋獨夜」に「無限少年非我伴、可レ憐清夜與誰同」の句が見える。

『菅家文章』「一月夜見梅花」に「可レ憐金鏡轉、庭上玉房鑒」の句が、「376 翫梅花、應製」に「隨處有梅惣可レ憐、不如獨立月明前」の句が、「407 古石」に「漱齒幽人意、相看太可レ憐」の句が、「288 元日、戲譜小郎」に「珍重行年五九春、可レ憐兒輩二三人」の句が見える。

↓ 補説 ②

補説 ①

○195句～196句「縱使魂思峴、其如骨葬燕」の二句に込められた「羊祜の故事」について

「襄陽の太守となった羊祜は、この地の風光を心から愛し、峴山に登っては置酒言詠し、終日そこで楽しんだ。彼が没した後、彼の徳を慕って民衆は峴山に碑を立てた」という話が、『晋書』卷三十四「羊祜傳」および『蒙求』「54羊祜識環」に載る。

▼『蒙求』「54羊祜識環」

「晋羊祜字叔子、泰山南城人、世吏二千石、至祜九世、並以清德聞。（中略）」

祜博學能屬文、魏高貴鄉公時、公車徵、拜中書侍郎、武帝有滅吳之志、以祜都督荊州諸軍事、出鎮南夏。累進征南大將軍南域侯。卒贈大傅。初有善相墓者、言祜祖墓所有帝王氣。若鑿之則無後、後遂鑿之。相者見曰、猶出折臂三公。祜竟竟墮馬折臂、仕至公、而無子。祜築山水、每風景必造峴山、置酒言詠、終日不倦。襄陽百姓於祜平生遊憩之所、建碑立廟、歲時享祀。望其碑者、莫不淚涕。杜預因名爲「墮淚碑」。荊州人爲祜諱名云。

▼松浦友久氏は

「羊祜」が守となった地（襄陽）のことを、「湖北省の西

北部、漢江のほとりに位置し、漢代以降南北（華北と華中）の勢力が激突する地点として、あるいはまた南北を結ぶ交通の要所として重視された。さらには、また漢江の水運を利用した物資の集散地たる商港として南朝以来繁榮し、遊樂の都市として知られた」と説明されている。（『漢詩の事典』より）。

▼清藤鶴美氏は、この二句について「道真是愛慕する京の山々を峴山にたとえ、西陲の筑紫を燕になぞらえたのである」と付記されている。（『菅家の文章』より）。

この二句には、どんなに自分の魂が京都を恋しく望んでも、遺骨は、そこからはるかに離れたこの西の筑紫に埋められるであろうという、いかんともしがたい深い絶望感が感じられる。

補説 ②

○199句～200句「敘意千言裏、何人一可憐」の二句に込められている詩情の考察

筆者は別稿<sup>3)</sup>でこの「敘意一百韻」の詩句内容に、深層部分の投影として白居易の元稹宛に送った唱和詩「0608代書詩一百韻寄微之」の存在に注視する必要があると述べた。以下、その一文を引用する。

この道真の詩の主題とも言える道真の「この詩で何を訴えようとしているか」ということに対しての私見を述べて結びとしたい。

その鍵は、「出典の分析(その二)」「深層部分の投影考察」で取り上げた、白居易と元稹らとで定着させた一百韻形式の五言排律の作品群にある。とりわけ、先学の指摘にあるように、道真のこの詩の構成法は、白居易の「東南行一百韻」、元稹の「酬樂天東南行詩一百韻」に拠るという考え方に全く異論はない。そしてその事実は谷口氏が言及する、「この『叙意』詩の形式が一百韻であることによっておのずと同形式の白居易『東南行』を踏まえて作っていることを読む者に理解させ、意識に上らせる仕掛けとなっているのである。このように元白の一百韻詩をいっぼうに置いてこの『叙意一百韻』を読むことでこの作品の性格もより明確に理解できる」<sup>1)</sup>の一文に尽きると考える。筆者はこの視点を更に補強できるものとして、新たに白居易の「代書詩一百韻寄微之」<sup>2)</sup>からの投影関係を探ってみた。既に指摘のある「東南行」よりも更に深層部分で濃厚な投影関係があることが判明した。

筆者はその理由を次のように考える。

先の白詩の「東南行」は、白居易が元稹を含む八人の親友に送ったものに対し、「代書詩」は「元稹」のみに向けられた唱和詩だからではないか。換言すれば、この道真が

「叙意一百韻」で最も訴えたかったのは、今の自分の心情を共に分かちあえる「一人」の友も持ち得ぬ「孤独感」ではなかったのか。自分の生の軌跡を「誰とも共有出来ぬ絶望感」とも言い直せるものである。

白居易が「代書詩」で「狂吟す 一千字／因つて微之に寄せしむ」と結ぶのと、道真が「意を絞ぶ 千言の裏／何人か一に憐むべき」の詠むその詩情の落差こそが、道真のこの詩で最も後世の者に伝えたかったことではないだろう。つまり、白詩が「中懷寫向誰」「何人共解頤」と問いかけて、それを「狂吟一千字／因使寄微之」と結ぶ詩情を、道真は「叙意千言裏／何人一可憐」として詠まなければならなかった所に、白居易のように心から信頼し合える元稹のような友を持ち得ぬ悲しみ、「天涯孤独」の絶望感を一層際立たせる句作りとなっていることが、明らかに。ここが道真のこの「叙意一百韻」で訴えたかった核心部分ではなかったのか。

この句の一九九句、二〇〇句こそがこの作品の主題となっている。つまり、白居易・元稹等の唱和詩の内容を一方で対比させれば、そうした心を許し合える友を持ちえぬ、道真の「天涯孤独の底知れぬ心の闇」の叫びが浮かび上がってくる。

## 総括考察

今回注釈の対象とした百八十一句から二百句の内容を概説してみる。

今回取り挙げた二十句は、十句毎を一段とすれば、「十九段」「二十段」目にあたる。

## 【十九段】

この十句では、左遷されるに到った状況の分析とそのことに對する心情を吐露する。才あるが為に却って災いに遭う『文選』や『莊子』の故事を踏まえて、自分自身の高位に登ったことが、この今の状況を生んだと悔やむ。またその災いが我が身のみならず家族、菅家一門に苛酷なまでに及び、今まで誠心誠意務めて来たことが却ってあだとなったことを嘆き、憤るその憤怒の念が横溢する内容となっている。

## 【二十段】

この結末の十句では、『晉書』の「羊祜傳」にある故事を踏まえて、京に戻ることもかなわず自分自身が太宰の地で命を落とすであろう予感にどこにも怒りを吐露することも出来ない無念さと、現状の非情さにおののきつつ、これも己れの宿命だと諦念する心情が流れる。これは、先に指摘したように、「一段」

と対峙させればより鮮明になる。ここにも道真の見事な作品構成への配慮がなされていることを再確認できる。

そして、この句の一九九句、二〇〇句こそがこの作品の主題となっている。つまり、白居易・元稹等の唱和詩の内容を一方で対比させれば、そうした心を許し合える友を持ちえぬ、道真の「天涯孤独の底知れぬ心の闇」の叫びが明らかになってくる。

以上二〇〇句を十句毎、「二十段」に分けながら構成を考察して来た。ここで総括をしてみる。この「敘意一百韻」は、五言二百句からなる排律という定型で構成され、しかも、全篇に亘り下平声「先」韻による一韻到底が貫かれている。又、全篇、奇数句と偶数句とが対をなすという徹底した構成の統一美が実践されていることにまず注目すべきである。そうした中で、句内容についても同様に、道真の意識的な構築がなされていると考えた。一方、この句構成については既に先学によりさまざまな考え方が提起されて来ている。<sup>⑤</sup>

筆者が全篇をあえて「均一」に「十句毎」に区分することを提起した大きな根拠は、八〇句「琴聲未改絃」の句のあとに、「已上十句、傷習俗不可移」の分注が見られる（一部の写本や刊本全本）点である。傍線を引いたようにこれを、十句を一まとまりのものとして構築していることを示唆する道真自身による分注と考えたからである。詩全篇に敷衍して考察すると、十句毎に二十段に区切ることで見事に、構成の統一がはかられて

いることが、先の具体的詩句の例示で実証できたと思う。

つまり、この構成一つをとっても徹底的にその統一性にこだわる道真の性向とも換言できるものを指摘できるように思う。道真の美意識がそこから垣間見られるのである。

そして、この作品の構成を考える時、見逃してはならないのは、「季節の推移」を基軸としていることである。「春」から「初夏」「梅雨」「盛夏」「残暑」「初秋」「仲秋」という京から太宰の地に我が身を移しながら、その我が身の周辺の事を季節の推移に触発されながら詠っているという一貫した詠作姿勢を押さえておく必要がある。一見、道真の心情が、あるいは志向するものが、その時々によって大きく変わっていく様が、そこに詠作上の一貫性を欠く詠みぶりの証左とも考えられるが、これを「季節の推移」を基軸として、とらえ直すとその季節感が読者に共有されていれば道真の心情の変化が無理なく読み手に伝わるということが理解できるのである。

#### 四

##### 作品制作時期考

最後にこの「敘意一百韻」の制作時期の私見を述べたい。

従来、この詩の制作時期については、川口久雄氏を始めとして、多くの先学が「三九句の「九見桂華圓」の句の解釈の箇所」で「左遷後九ヶ月後の時期」つまり「十月から十一月」（晩秋から

初冬の候）であろうと論じられて来た。

ところが前述したように、この詩は「季節の推移」を基軸とした詠作内容になっている。そこには、「春」から「初夏」「梅雨」「盛夏」「残暑」「初秋」そして「仲秋」の景を詠いつつも、「晩秋」から「初冬」の叙景や心象風景が全く詠まれていないように思えるのである。したがって「左遷後の九ヶ月後」という推定にはどうしても納得が行かないのである。波戸岡氏がその点に關して「道真は二月の初に京を出発したであろうから、此の時は初冬の十月ということになる。そこでこの詩も十月作とされているのである。けれども、右の詩句中には、「雲雁・「寒吟」・「蘭氣敗」等とあり、これらは初冬の景でなく晩秋の景物である。おそらくこの「九見桂華圓」は、表現技巧上の虚構であつた可能性がある。つまり、一と九との対句仕立て上、「九」としたのであろう。この詩の創作は、実際には、十月ではなく九月であつたのではないか。」と述べられているのは傾聴に値する見解である。筆者はさらにこの考えを押し進めて、「九見桂華圓」を「今年に入つて九回目の満月を迎えた（＝今まさに九月仲秋の明月が照り輝いている）」との解釈を提起したい。その根拠を、以下、具体的に二点挙げてみる。

まず、一点目は

「二三句 一二四句」皎潔空観月、開敷妙法蓮」の「月」

「蓮」についてである。



この二語については、川口久雄氏は岩波古典大系本の頭注と補注で次のように説明されている。

「月」は真理の象徴。皎潔は、さやかにいさぎよい月光の形容。「蓮」華には「出水」と「間敷」の二義があり、泥水を超出し、次に真理の教えを開き示す、という。(四九三頁及び七三二頁)

いずれも『法華経』の教義に仮託する事象としてこの二句で使われている語であるのは先学の指摘の通りである。

一方で、筆者はこの二語が「実景」、つまり「今、目のあたりにしている風物」であり、それに触発された心情と考えられるのではないかと思う。これには、この「484叙意一百韻」が詠作された時とも関わりがある。一三八句に「九見桂華圓」の句があるが、筆者はこの句から陰暦九月に詠作されたと見る。この詩がほぼ時系列に、左遷の命が下ってから京を放逐される時より、仲秋を迎えつつある今までの九ヶ月の心情を記している内容と考えるならば、この「月」「蓮」の二語の使われている一二三句、一二四句は、実際に「蓮」の開花を迎える陰暦七月から八月頃の風物を詠んでいるもの。つまり、夏の終わりから初秋の空気が秋の気配を心なしか漂わせ始めた頃からさらに秋最中の、仲秋の「名月」の頃を詠んでいるものと考えられないだろうか。少なくとも筆者には、太宰の謫居近くに、蓮の花の

開花を見たとする機会があり、それにより、時節の推移を体感したものと考えたい。

つまり、この一三八句までの前の句を見ると、酷暑から涼気を感じる時候に移りつつあることを「蓮の花」や、夜空に浮かぶ「月」で感じ、さらに「寒蟬」や「蘭の花」にみている。それは「陰暦九月」の事象と合致する。

一方、それが陰暦十月以降となると、「初冬」の事象に及んでしかりであるが、その証となる詩情が見あたらないからである。

そして二点目は、

「叙意一百韻」の詩の直後に「485 秋夜 九月十五日」を置いてのこと

このことは既に波戸岡氏の前述の論の中で指摘されていること①と同旨の見解だが、道真が、ほぼ『菅家後集』の詩作品を時系列に配置していることから鑑みるに、この詩が十月以降の作品とすれば、それをあえて、この配列を破り、「485 秋夜 九月十五日」の前に置く事由が、見当たらないのが、筆者の考えである。

ここは、「陰暦九月」に詠まれたことを意味しているとみなしたい。

【注】

(1) 拙稿「菅原道真研究」『菅家後集』全注釈(二二)

「有明工業高等専門学校紀要」第四十五号

(2) 拙稿「菅原道真研究」『菅家後集』全注釈(一)――

「国語国文学研究」第三十六号 熊本大学国語国文学会

(3) 拙稿「菅原道真の大宰府時代の漢詩「敘意一百韻」の構成論考

――「敘意一百韻」の重層構造についての考察一試論――

(4) 谷口孝介著『菅原道真の詩と学問』(塙書房)

「第三章 道真文学の行くへ」二、一百韻形式の教授と意図」

二四九―二六〇頁

(5) 波戸岡旭著『宮廷詩人菅原道真』の注(8)の中に次の一文がある。

「叙意一百韻」が十句乃至二十句の小節をなすと看做すのは、全くの私見による試案である。因みに金原理氏は随意十段落とし(菅原道真の漢詩)〔平安朝漢詩文の研究〕、大岡信氏は十八段に区切っている。

最近の研究成果の一つに柳澤良一氏の「敘意一百韻」全編に亘る注釈稿がある。その中で「全体の構成と要旨」として、全篇を「序・一・

二・三・四・五・終章」と区切り、第二章は更に四節に分け、第三章を更に三節に分ける構成法を考案されている。(章毎の句数は随意。)

〔菅家後集〕注釈稿(十七)八十五頁―八十六頁(『金沢学院大学紀要』第六号)

(6) 波戸岡旭著『宮廷詩人 菅原道真』(笠間書院)三七〇頁

〈追記〉(一)

この稿を草するにあたり台湾元智工學院の中国古典詩詞曲文研究のためのサイトである「網路展書讀(BIGS)」(<http://ds.saini.yzu.edu.tw/>)の「全唐詩」の項、及び北京大学中文系の唐代以前の詩歌の総合データベースである「全唐詩全文檢索系統(UTF-8)」(<http://chinese.pku.cn/cgbin/fanglibrary.exe>)を詩語檢索の為に大いに利用した。

〈追記〉(二)

平成十八年四月より、現在に至るまで「大牟田市民大学講座」――市民大学ゼミ、道真梅の会――の会員、須藤修一氏・諸田素子氏、田中陽子氏、野田了介氏、井原和世氏、荒川美枝子氏の六名と定期的に「敘意一百韻」の講読会を催して来ている。この会で討議・検討したものを基に平成二十年秋、「敘意一百韻」全注釈(『焼山廣志監修 道真梅の会編』)を發刊した。本稿はその内容に再考察を試み若干、加筆し稿をしたため直したものである。

(やきやま ひろし)／

大学院文学研究科第七回修了・有明高専